

Title	前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道
Sub Title	Translating the Arabian Nights from the original : some distinguishing features of Professor Shinji Maejima's monumental lifework
Author	杉田, 英明(Sugita, Hideaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.4 (2010. 12) ,p.99(439)- 112(452)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20101200-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道

杉田 英明

一、翻訳実現へ至る道程

井筒俊彦訳『コーラン』と並ぶ日本のイスラム研究の偉大な成果として、前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』全十二巻（平凡社東洋文庫、一九六六―八一年）についてお話をしてみたいと存じます。

前嶋先生がアラビア語原典からの『アラビアン・ナイト』邦訳を志した契機は、大きく見て三つほどあったように思われます。その第一には、一九二八年三月、東京帝國大學文學部東洋史學科の卒業生送別会の席上、「宴会の座興」のつもりで述べた原典翻訳・研究の希望が「識となり」^①、三十数年後に翻訳の実現に至ったことが挙げられます。第二は、一九六〇年九月、フルブライト交換研究員として訪問したシカゴ大学東洋言語文明学部の東洋研究所で、世界最古（八七九年）の『アラビアン・

ナイト』写本断片を見て強い感銘を受けたこと、第三は帰国後の一九六三年十月、平凡社の東洋文庫が創刊され、刊行予定書目のなかに『アラビアン・ナイト』全十五巻が含まれていたことでした。^②直接の契機は一九六〇年代に訪れたにせよ、原典訳の実現は訳者の長年の宿願であったと言つてよさそうです。

では、その原典訳を行なうのに必要なアラビア語の知識は、どのようにして習得されたのでしょうか。現在とは違って、前嶋先生が大学を卒業された一九二〇年代後半は、アラビア語を教える学校はおろか、教師さえも日本にはほとんど存在していませんでした。一九二七年頃、先生は友人の小林元（^{はじめ}一九〇四―六二年）氏とともに、アラビア語の師を求めて東京の町をあてもなく歩き回ったといえます。^③その後、一九二八年四月から十二年間の台湾時代を経て東京に戻り、滿鐵東亞經濟調査局に勤務

した一九四〇年六月から四五年十月までの時期が、本格的にアラビア語と接するようになった最初ではないかと思われまゝ。

その舞台は、大日本回教協會が主催したアラビア語講習会だったのでないでしょうか。この講習会は一九三九年春から、東京神田駿河台の神田生活会館で、菊池慧一郎(一九四五年歿)氏を講師として開催され、その内容が同協會の雑誌『回教世界』に「韋駄天アラビア語」と題して連載されています。⁴これを足掛かりとし、前嶋先生はその後、ヨーロッパ語で記された文法書などを頼りに自学自習によって、少しずつアラビア語の世界に入ってゆかれたように見受けられます。東亞經濟調査局では、イルヤース・ユースフ・アジュルーニーと机を並べていたので、この若いシリア人から生きたアラビア語を学ぶ機会もあったでしょうし、それらの知識を生かして、折から東亞經濟調査局で購入したガブリエル・フェラン(一八六四—一九三五年)やベルンハルト・モーリッツ(一八五九—一九三九年)旧蔵の「回教文献」を自由に閲覧することもできたのだと推測されます。

そうしたなかで、前嶋先生は一九四一年秋、井筒俊彦先生とともに東京の代々木上原へ、アブデュルレシト・

イブラヒム(一八五七—一九四四年)を訪問しておられます。⁵イブラヒムは一九三三年に再来日し、当初は湯島天神下に、また三八年五月の東京回教禮拜堂(東京モスク)完成後はモスクの近くに住まっていました。⁶井筒先生は一九三七年に慶応義塾大学文学部を卒業し、助手になった頃から旧約聖書学の関根正雄(一九二—二〇〇〇年)氏と一緒にドイツのエルンスト・ハルダー『アラビア語文法』でアラビア語を独習、さらに一か月ほど『コーラン』を読了し、その後は先ほどの坂本勉先生のお話にもあったように、まず湯島天神下のイブラヒム、続いてムーサー・ジャールツラー(一八七五—一九四九年)から二年ほど、親しくアラビア語やイスラム文献読解の指導を受けていました。⁷四一年にイブラヒムを訪問したとき、実は井筒先生は「アラビア語で生活し、謂はゞ文字通りアラビア語を生きて」⁸いるという状態であり、アラビア語学習において前嶋先生の遙か先を歩んでいたわけです。

ちなみに井筒俊彦文庫には『アラビアン・ナイト』関連の原典や研究書が何点か含まれています⁹が、戦後刊行された『アラビア語入門』の序文に、読者の「目的が、單に『千夜一夜物語』のやうな通俗文學の鑑賞(中略)に

あるならば、本書以上の文法的知識は全然必要としないであらう¹⁰⁾とあるように、井筒先生の眼から見ると『アラビアン・ナイト』は通俗文学にすぎませんでした。これに対し、前嶋先生は同書への書評で、

千夜一夜物語の如き、成程極めて大衆的のものであるが、観方によつては、民俗其他各方面の文化現象研究資料として役立つ點が多く、この點からも尊重すべきものと思われる。¹¹⁾

と記していらつしゃいます。両者の『アラビアン・ナイト』評価の差異は、ここからも明らかに読み取ることができます。

さて、前嶋先生が『アラビアン・ナイト』のアラビア語原典を最初に入手されたのはいつ頃のことだったのでしょうか。台南時代に雑誌『回教圈』に発表された論考¹²⁾「舍利別考」には、

アラビアの原文どころか、Burtonの英譯本もMar-tiusの佛譯も利用出来なかつた。中央公論社出版の「千夜一夜」はバートンの英譯本を通じての重譯であ

るが、現在はこれを利用する。¹²⁾

とありますので、とても原典を手に入れられるような状況ではなかつたことが判ります。一方、のちには「ブーラク版は、戦争前から持っていた¹³⁾とも回想しておられることを勘案すると、前嶋先生は、この東亞經濟調査局時代にヨーロッパの古書店を通して最初の原典を購入した可能性が高いように思われます。ブーラク版とは、言うまでもなく、一八三五年にカイロ郊外のブーラク印刷所で刊行された、最も重要なアラビア語原典版の一つです。のち、実際の翻訳に取りかかる一九六〇年代以降、このブーラク版に基づくカイロでの覆刻版（一八八〇年および八七／八年刊行の四冊本）をはじめとして、

- ・ カルカッタ第二版（一八三九―四二年）全四卷
- ・ ベイルート版（一八八八―九〇年）全五卷
- ・ プレスラウ版（一八二五―四三年）全十二卷

といった重要な原典版が順次揃えられてゆくことになりました。カルカッタ第二版はライデンのブルル書店から古書で購入し、ベイルート版は井筒先生がベイルートから

送付されたとのことです。プレスラウ版は翻訳の第六卷（一九七二年）から参照されています。¹⁴これらの原典と並行して、ヨーロッパ諸国語訳も取り寄せて利用したことは申すまでもありません。

二、前嶋訳の特色

前嶋訳の第一卷が刊行されたのは一九六六年七月、訳者六十二歳のときでした。以後、第十二卷までを足かけて十六年かけて翻訳し続けます。各卷の刊行年を列記すると、

1…一九六六年	2…一九六六年	3…一九六七年
4…一九六七年	5…一九六八年	6…一九七二年
7…一九七四年	8…一九七六年	9…一九七八年
10…一九七九年	11…一九八〇年	12…一九八一年

のようになつており、第五卷までは順調に、ほぼ半年に一冊の割合で進行しているのに対し、第五卷と第六卷とのあいだに四年間空白のあることが判ります。これは「公害とか、学園紛争とか」の衝撃や「訳者の無気力」に由来すると、訳者自身が記しておられます。¹⁵しかし、一

九七年一月三月に慶應義塾大学を停年退職し、時間的な余裕ができたこともあつて心機一転、その後はほぼ一〜二年に一冊を刊行し続けてゆくことになりました。

前嶋訳全十二卷の特色を一言で表現すれば、「進化する」翻訳と呼んでよいかと思われまふ。最初の数卷、とくに第一卷は、現代の眼で見直すと、底本の扱いの不統一や誤訳などの不備が目立ちますが、空白の四年間を経た第六卷以降は見違えるように充実にゆき、最後の第十二卷で真に円熟の境地に達します。ただし、後の巻になるほどアラビア語の片仮名表記を多く取り入れる方針を取つてゆくため、逆にその片仮名表記の誤りが目立つ結果ともなつています。ここでは、二点に絞つて、前嶋訳の特色を示す具体例をお目にかけていと存じます。¹⁶

(1) リットマン独訳への依拠

まず第一の問題として、翻訳にさいし先行するヨーロッパ語訳——とくにエンノ・リットマン（一八七五—一九五八年）のドイツ語訳——に依拠するあまり、その誤訳を踏襲したり、原典にない語句を付加する結果になつたりする場合がきわめて多いことを指摘できます。第一卷から、リットマン訳に引かれたために生じた不適

切な訳の例を、「前嶋訳(第一巻頁数)＝リットマン訳(第二巻頁数)↑カルカッタ第二版原文(第一巻頁数・和訳)」の形で掲げてみましょう。¹⁷⁾

- ・そやうは癪を病み(九〇頁)＝ aussätzig (p. 85) ↑ hu-wa mubtalan (p. 47: 奴は病気である)
- ・漆喰をはがし(一四七頁)＝ wir nahmen den Mörtel weg (p. 128) ↑ shūnā al-turāb (p. 79: 土を払った)
- ・魔鬼が(中略)われわれの面前にぬっとのし上がった(イブノト) 参りました(一八二頁)＝ der Dämon stieg auf vor uns (p. 155) ↑ tadallā 'alay-nā (p. 98: 我々の上に舞い降りた)
- ・舟は顛覆し(一九六頁)＝ kenterte das Boot (p. 166) ↑ 対応原文なし。
- ・扉は半開きになっております(二二七頁)＝ deren Tür ich angelehnt fand (p. 191) ↑ ra'aytu bāba-hu mardudan (p. 124: 扉は閉じられていた)
- ・死の枷に悩むあゝがれ心をば、なおも打つのか。(二二三頁)＝ Und das liebende Herz in Todesbande schlägt? (p. 180) ↑ sabayna+qatīl+mustahāmat-mu'adhhaba (p. 116: 魅惑のれ、苦しみ、死んだ男

を擒にする)

いずれの場合も、アラビア語原文ではなく、リットマンのドイツ語訳を底本にしたとしか思えないほど、前嶋訳とドイツ語訳はよく一致しています。とくに最後の例は詩の一部分ですが、リットマン訳は誤訳ではありません。「擒にする」*sabayna*という原文を“in Bande schlagen”という成句で表現しているのに対し、前嶋訳はこのドイツ語を読み違え、「枷のなかで打つ」と直訳したため、意味の通じない訳文になっています。

また、前嶋訳第一巻で、アラビア語原典にない間投詞が挿入された箇所をリットマン訳と対照すると、

- ・ちうちう(一一六頁)＝ Pfu, pfui (p. 105)
- ・ええままぢ(一一〇頁)＝ Ja (p. 115)
- ・あゝ(二二三頁、一六六頁)＝ Ach (p. 116, p. 142)
- ・あわれ(二〇六頁)＝ Ja (p. 174)
- ・しかり(二三〇頁)＝ Ja (p. 193)

のように、これまたよく対応します。第一巻はまだ「小手調べ」で、翻訳のこつがよく呑み込めていない段階に

あつたため、一般に最も良心的・模範的な翻訳と評されるリットマン訳^⑧に依拠する結果になったのはやむをえないことだったかもしれない。ただし後の巻では、フランチェスコ・ガブリエリ（一九〇四—一九六六年）監修のイタリア語訳などを参照するようになったこともあって、リットマン訳への依拠は目立たなくなつてゆきます。

(2) 詩の翻訳

第二に取り上げたいのが、詩の翻訳です。『アラビアン・ナイト』には長短合わせて千四百二十編ほどの詩が含まれており、地の文に対する比重も大きいので、詩の扱いが翻訳全体の成否の鍵を握ると言っても過言ではありません。前嶋訳も、第一巻ではともかく詩の意味を取つて訳文に反映させるだけで手一杯という印象なのに、対し、巻が進むに従つて、読み上げる場合の口調を重視した五七調や七五調、漢文訓読調など、凝つた翻訳へと「進化」してゆく様子が窺われます。説話集中には、同一の詩が巻を隔てて複数回登場する事例がいくつもありますので、それによつて訳詩の変容を辿つてみましょう。次に掲げるのは、カルカッタ第二版の第一巻に二回（第十一夜、第二十一夜）、第三巻に一回（第五百六十一夜）

登場する二対句です。

苦難に際会したときは、自分の生命いのちを確保せよ、
家をして、建て主の死をば告げしめよ。
土地ならどこにも見つけられるが、
自分の生命に代わりは見出しがたいから。

wanafsa-ka tuz bi-hā 'in šibta dayman

wa-khalī-d-dāra tan'ā man bana-hā

fa' inna-ka wājidun 'arḍan bi-'arḍin

wa-nafsu-ka lam tajid nafsān siwā-hā ^⑨

これを、前嶋訳第一巻（一四五—一四六頁）では、

災難のせまりしときは
身をもつてお逃げなされよ。
家をして嘆かせなされ
そを建てたひとのことをば。
人間至るところ青山ありだが
命にやかけがえありません。

と、原詩の第一対句を四行、第二対句を二行に対応させ

て訳しています。最初の四行は一応五七調ですが、その後は四・六・八、四・四・五となっていて、全体に口調のよさはあまり考慮されておりません。「人間じんかん至るところ青山あり」は、言うまでもなく、幕末の僧侶・月性げつしょう（一八一七—五八年）の七言絶句の有名な一節の転用です。これが、第二卷（三九頁）に再登場するときには、次のような訳詩に変わっています。

命めいからがら逃げなさい、禍わざわいあなたにせまるとき、
主なぬしき家を嘆かしなさい、建ててくれたその人を。
あなたには、到るところに青山あれど
あなたのお命いのちかけがえなしです。

ここでは一対句が二行に対応し、前半は七五調が基調、後半も字数こそ五・七・七、八・八とやや変則ですが、全体に滑らかな作品に仕立てられていることが判ります。さらに最後の第十二卷（二二四頁）では、

虐しいたげられる 場所からは
思い切りよく 去るがよい
あとは屋敷に そを建てた

前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道

人のことをば 嘆かせよ。
ひとつの土地を 離るとて
君は他の地を 見つけよう
けれど命と いうものは
他にはどこにも 見つからぬ。

のように、原詩の一対句を四行、計八行の完璧な五七調に直して、分かち書きを採用しています。これは、晩年の前嶋先生が好んだ訳詩の形式でもあり、ここでは訳者が悠然と自在の境地に遊んでいるかのごとき印象さえ受けます。学術論文のなかで用いる訳詩としては柔らかすぎるにせよ、物語中で朗誦するにはうってつけの訳し方と言ってよいでしょう。

この五七調の分かち書き形式と並んで、前嶋訳の真骨頂と称してよいのが、漢文訓み下し形式の訳詩です。もとより明治生まれの人々は、現代人に比べると遙かに豊かな漢文の素養を備えていましたが、前嶋先生の場合にはそれに加え、東洋史学科のご卒業で台湾滞在中も長かったので、漢籍に親しむ機会も多く、漢文訓読式の文章を作ることにはそれほど難しゅうなかつたと思われまします。例えば、カルカッタ版の第一卷（百二十四夜）と第四卷（七百八

十六夜)には、次のような二対句が繰り返して現われます。

私が彼女の衣服を剥いで隠し所をあらわにすると、

そこにはわが性格と富とにふさわしい、きりりと
締まった細道があった。

内部にそれを半分挿入するや、彼女は思わず溜息を
ついた。

「何を嘆くの」と私が問えば、彼女曰く「残り半分
が待ち遠しく」。

wa-lammā kashafu-th-thawba 'an saḥī kussīna

wajadu bi-hā dīqan ka-khuḍq-i wa-'arzāq-i

fa-'awlaytu fi-hā nisfa-hū fa-tanahhadat

fa-qultu li-nā hadhā fa-qalat 'ala-l-baḡi

これは『アラビアン・ナイト』にしばしば登場する猥
褻詩の一つです。第一対句の後半、「きりりと締まった
細道」*dīq*と訳した箇所は、自分の正確がまっすぐ(廉
直)で財産が少ない(清貧)ことと、相手の女陰の締ま
りがよいことを懸詞の形で同時に示唆しています。前
嶋先生の歿後、その遺志を受け継いで東洋文庫版の翻訳

を完成させた池田修(一九三三年生)先生は、第十五卷
(二二三頁)でこの詩を次のように訳しておられます。

下着を除きて女陰眺むれば

締め良きことわが性さがと

わが好みに合うが如し

われためらたぐいつ、一物を

乙女に半ばさし込めば

溜息こたつきて応えたり

「そは何故の溜息か」

わが問いに乙女は答えて

「残さずわらわに与えたまえ」

原詩の対句数とは無関係に、全体は三行三連の文語調に
なっていることが見て取れます。「乙女」「われためら
いつ(つ)」は原文にない追加、「わが好み」は原文の「富
'arzāq」の意訳、「一物」も原文では「それ」と曖昧に示さ
れるだけの代名詞を、ここではあえて明示しています。
いかにも語学者らしい、即物的・説明的で淡々とした訳

しぶりと評してよいでしょう。これに対し前嶋先生は、第五卷（九三頁）で、

輕羅を披ひいて望む玉門関

狭窄せうさうさながら似たり吾が心と産とに。

進入半道にして娘むすめは嘆息す

借問すれば恨み答う残途遠しと。

という漢文訓読調をひねりだしました。女陰の別名である「玉門」と、中国敦煌付近の関所である「玉門関」とを懸けて、全体は辺境を主題とした一編の塞外詩のごとき体裁になっています。実際、句の末尾にこの地名を置く漢詩には、「春光度わたらず玉門関②」「孤城遙かに望む玉門関②」など、古来有名な作品も少なくありません。「狭窄」「半道」「残途遠し」が旅の辛さを暗示し、「借問しよもんすれば」という漢詩の類出表現によって雰囲気を盛り上げます。仮に「さながら」を「宛ら」と漢字表記すれば、各行とも漢字七文字になるといふ凝りようです。ただし、さすがに平仄までは合っておりませんが。

一般にヨーロッパ人の場合、こうした猥雑表現をラテン語に置き換えて、道徳律からの逸脱の誹りを免れよう

とする傾向があります²⁴。前嶋先生がそれをどの程度意識しておられたかは定かではありませんが、ここでは結果的にそれと同一の効果が生まれています。漢文の素養豊かな先生による、会心作と言つてよいのではないのでしょうか。

三、『アラビアン・ナイト』研究の位置づけ

前嶋先生は、『アラビアン・ナイト』を「中世アラブ世界の縮図②」「アラブの民の心を理解する最良資料②」と捉え、これを歴史研究の素材として活用しようとする志向が顕著でした。それは、先にも引いた台南時代の「舍利別考②」（一九三九年）や、東亞經濟調査局時代の「アラビヤ人と咖啡——民族文化的考察②」（一九四三年）²⁷に始まって、原典訳を進めていた晩年の諸論考に至るまで変わっておりません。とくに「舍利別考②」は四十数年後、当初の大宅壯一らによるバートン版邦訳からの引用を原典からの直接訳に置き換え、全体の趣旨は変えないままで「舍利別（シャーパーット）考②」と題した改定版を執筆しています。ここからも、先生がこの主題と方法にいかにかに深い愛着を抱いていたかが窺われます。

こうした『アラビアン・ナイト』観には、この説話集

の最初の翻訳者であるアントワーヌ・ガラン(一六四六—一七一五年)や、優れた英語抄訳を刊行したエドワード・レイン(一八〇一—七六年)ら、ヨーロッパの東洋学者たちの見解をそのまま踏襲した面があったことは否めません。実際、前嶋先生は彼らの見方を要約して、

十七世紀から十九世紀の前半に至るころ、中世そのままのアラブ社会が、現実に残っている実情を、つぶさに観察する機会に恵まれた学者たちは、『千夜一夜物語』こそ、その忠実な写生であると考えるのが普通だったように見受けられる。²⁹⁾

と述べ、その姿勢を基本的に肯定しておられます。ただそのさいの問題は、「中世アラブ社会」という言葉が、アッバース朝からマムルーク朝、オスマン朝に至るまでの長い時間的推移を捨象した、あまりに大雑把で劃一的な概念であり、十九世紀の近代化開始以前、アラブ世界はほとんど変化や進展のない社会であったという前提に立っている点であろうと思われる。また、そもそもカルカッタ第二版やブルーブック版といった原典版が成立するまでの写本の伝承過程自体、まったく検討されてこな

かったのです。³⁰⁾

この状況を大きく変化させたのは、前嶋先生ご逝去の翌一九八四年、アラブ出身の北米の研究者ムフスィン・マフディー(一九二六年生)によって刊行された、十四世紀シリア写本に基づく『アラビアン・ナイト』校訂版³¹⁾でした。このマフディー版は、最初の二百八十二夜を含む説話集の「古層」を復元しようとした劃期的な試みです。これによって、少なくともそこに含まれる物語については、その初期形態がようやく明らかになりました。先生がご存命であったなら、真つ先にこれを史料として利用されたに相違ありません。

例えば、先にふれた「舍利別(シャーベット)考」改定版では、カルカッタ第二版の計二十三か所、十三編の物語からシャーベットの使用の実態を示す本文が引かれています。このうち、マフディー版にも含まれている物語は三編のみですが、そこに属する五つの文章のうち、対応関係を確認できるのは三か所です。これを「カルカッタ第二版Ⅱマフディー版」の順に示しますと、

・第十二夜「乙女は麝香入りのシャーベット (sukkat
mumassak) を持つてきて、私に飲ませてくれまし

た」¹¹第四十三夜「彼女は私に、大きな盃に入れたシャーベット (sharab) を飲ませてくれました」

・第二十夜「彼らは薫香を焚いたり、砂糖シャーベット (sukkar) を飲んだり、薔薇水を振りかけたりした」¹²マフディー版対応欠。

・第二十三夜「彼は一壺のシャーベット (sharbat) を持って戻ってきましたが、それには薔薇水と麝香が加えてありました」¹³第九十五夜「薔薇水で味つけし、砂糖と氷を加えた一壺のシャーベット (ugsima) を持ってきました」

・第二十四夜「料理人は氷と砂糖を加えたシャーベット (ugsima) を飲ませてくれました」¹⁴第九十六夜「料理人は氷と砂糖を加えたシャーベット (ugsima) を飲ませてくれました」

・第百五十三夜「¹⁵さまざまな種類のシャーベット (sharab) や果実」¹⁶マフディー版対応欠。¹⁷

原文で “ugsima” とあるのは、「酢蜜」を意味するギリシア語 “oxymeli” に由来する言葉だと言われます。こうして見ると、この論文ではそもそも何を以て「シャーベット」と呼ぶかという定義が曖昧であったことに気づきま

前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道

す。しかし、それはさて置くとしても、マフディー版を利用することによって、二十三か所のうち少なくとも三か所は、十四世紀まで溯りうる文言であることが判明します。つまりそこには、十四世紀段階でのシャーベット使用の実態が反映されており、それ以外の箇所は、十四世紀以降、十八世紀までのあいだに付加された可能性が高いことになるわけです。

このように、マフディー版の出現によって、『アラビアン・ナイト』の史料的価値は格段に高まり、前嶋先生が志向された研究方法は、より厳密な形での実現が可能となりました。それを研究のなかに受け継ぎ、生かしてゆくことこそ、私ども後に続く世代の務めではないかと存じます。

註

* 旧稿で扱った事柄に関しては、煩瑣と重複を避けて一次史料の出典表示を省略し、旧稿の当該箇所のみを示す。ただし、引用文は例外とし、典拠を明示する。

* 関連する旧稿は以下のように略記する。

・「人と業績」¹⁸前嶋信次氏の人と業績¹⁹前嶋信次『千夜一夜物語と中東文化』前嶋信次著作選1、平凡社東洋文庫、

二〇〇〇年、四三七―六八頁。
 『戦後日本』Ⅱ『戦後日本の『アラビアン・ナイト』——翻訳と研究・批評を中心に』『外国語研究紀要』第十二号、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部、二〇〇八年三月、一―六〇頁。
 『講読事始』Ⅱ『アラビアン・ナイト』原典講読事始——昭和前期におけるアラビア語研究の先達たち』『東洋文化』第八十七号、東京大学東洋文化研究所、二〇〇七年三月、二〇五―二五頁。

- (1) 前嶋信次「アラビアン・ナイトを訳す」『信濃毎日新聞』一九七九年十一月六日、夕刊第四面「ぶんか」。のち、同『イスラムの宗教と歴史』世界聖典刊行協会、一九八七年、二七―一頁。
- (2) 「人と業績」四五六―五八頁。「戦後日本」一〇頁。
- (3) 「人と業績」四四八頁。
- (4) 「講読事始」二二二―一四頁。二〇〇九年四月二十八日、本シンポジウムの打ち合わせのため慶應義塾大学で家島彦一先生にお目にかかったさい、「前嶋先生は神田の講習会に通ったという話をしてもらった」旨のご教示を得ることができた。前嶋先生ご自身の著作中には講習会への言及は皆無なので、この証言は大変貴重である。
- (5) 「人と業績」四四八頁。
- (6) イブラヒムの来日については、以下の諸論考に詳しい。坂本勉「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」および松長昭「東京回教団長クルバ

ンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉編著『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年。小松久男「イブラヒム、日本への旅——ロシア・オスマン帝国・日本」『刀水書房』二〇〇八年、一三六―六一頁。松長昭「在日タール人——歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち」『ユーラシア・ブックレット』東洋書店、二〇〇九年、三九―四九頁。

- (7) 「人と業績」四四八―四九頁。
- (8) 井筒俊彦『アラビア語入門』慶應出版社、一九五〇年、「序文」四頁。
- (9) 『井筒俊彦文庫目録 アラビア語・ペルシア語図書の部』慶應義塾図書館、二〇〇三年。四〇七―〇九頁、二九八頁には、① ベイルート版(全七巻、一九五六―五八年)およびカイロ・ブーラーク版(全四巻、一八九三／四年)、② ハサン・ムハンマド・ジャウハルらによる再話本(カイロ、一九五二年以降刊、全九冊)、③ サイド・ジュイダ・アッハサット・ハールらによる再話本(カイロ、年記なし、全五冊)、④ スハイル・アル・カラマーウィーによる研究書『千夜一夜』(カイロ、一九五九年)が見られる。また、『井筒俊彦文庫目録 和漢書・洋書の部(稿)』(慶應義塾図書館、二〇〇二年)二頁には、前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第一、二、四巻が登録されている。
- (10) 井筒俊彦『アラビア語入門』「序文」三頁。
- (11) 前嶋信次「書評」井筒俊彦著『アラビア語入門』『史學』第二十五巻一号、一九五一年七月、一一八頁。

(12) 前嶋信次「舍利別考」『回教圖』第二卷六号、一九三九年六月、一二頁。「戦後日本」三三三頁。

(13) 前嶋信次「アラビア夜話の原典をまよやま」『三田文學』第五十四卷二号、一九六七年二月、二〇頁。原文には「ブーラーの版」とあるが、引用にさいして訂正した。

(14) 「戦後日本」一一―一三頁。ペイルート版の送付については、窪寺紘一「イスラム学事始——前嶋信次の生涯」(世界聖典刊行協会、一九八九年)一七八頁に記載がある。

(15) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第六卷、「あとがき」三〇一頁。

(16) 前嶋訳全体の特徴と問題点については、「戦後日本」一四―一七頁で詳しく論じている。以下にはその一部を摘記した。

(17) リットマン訳とカルカッタ第二版の書誌情報は以下の通り。

・Enno Littmann, *Die Erzählungen aus den Tausendundein Nächten*, 6 vols. Wiesbaden: Insel Verlag, 1953 [1921-28].

・*Alf Layla wa Layla*, ed. W. H. Macnaghten, 4 vols. Calcutta: W. Thacker / London: W. H. Allen, 1839-42.

(18) 前嶋訳「あとがき」でもしばしば言及されるオランダの比較文学者ミア・ゲルハルト(一九一八―八八年)の「物語の技法」から、最新の成果を取り入れた『アラビアン・ナイト百科事典』に至るまで、リットマン訳に対する学術的評価は高々。Mia I. Gerhardt, *The Art of Story-Telling: A Study of the Thousand and One Nights*, Leiden: E. J. Brill,

前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道

1963, pp. 104-08; Ulrich Marzolph and Richard van Leeuwen, *The Arabian Nights Encyclopaedia*, 2 vols., Santa Barbara, California: ABC-CLIO, 2004, pp. 624-25. しかし、仔細に検討すると、リットマン訳は先行するパートン訳に依拠し、その誤訳を踏襲している場合が少なくない。

(19) *Alf Layla wa Layla*, Vol. 1, p. 78; p. 161; Vol. 3, p. 68. 初出箇所は全五対句中の最初の二対句、二回目は全四対句中の最初の二対句、三回目は全五対句中の最初の二対句。三回目の二対句にはわずかながら文言の異同がある。残りの対句は相互にかなり異なっている。引用は初出箇所によった。詩の韻律は al-wāfir.

(20) 釋月性『清狂遺稿』上、大洲鐵然・天地哲雄同輯、田中治兵衛、一八九二年、二五丁オ「將東游題壁」二首のうち第二首の結句。蘇東坡(一〇三六―一〇一年)の七言律詩「予事^はを以て御史台の獄に繋がる。獄吏、稍や侵さる。自ら度るに堪うること能わず、獄中に死して、子由と一別するを得じと。故に二詩を作りて、獄卒の梁成に授け、以て子由に遺る。二首」の「其の」第五句「是る処の青山骨を埋むべし」(原漢文)を意識した表現。『蘇文忠公詩合註』卷十九(古今体詩)所収。訓み下しは、小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』岩波文庫、一九七五年、一六二頁(ルビは適宜省略)。

(21) *Alf Layla wa Layla*, Vol. 1, p. 600; Vol. 4, p. 27. 両者間にはわずかながら文言の異同がある。引用は前者による。詩の韻律は al-tawīl.

(22) 王之渙「涼州詞」の結句。『全唐詩』卷二百五十三・王之渙

- 漢「涼州詞二首」の第一。
- (23) 王昌齡「從軍行」の軼句。『全唐詩』卷一百四十三・王昌齡四「從軍行七首」の第四。
- (24) 例えば、イギリスの東洋学者ニコルソン(二八六八—一九四五年)は、ペルシア神秘主義詩人ルーミー(一一〇七—七三年)の『精神的マスナヴィー』英訳において、猥雑な詩句全体をラテン語訳で示している。Reynold A. Nicholson, *The Mathnawi of Jalal'uddin Rumi*, 8 vols., Cambridge: Gibb Memorial Trust, 1926-40, Vol. 6, p. 231. また、リットマンの『アラビアン・ナイト』ドイツ語訳では、第四百二十三夜¹⁾の猥雑な詩句は訳出を控え、「例えばユウエナリスのラテン詩によってのみ翻訳されうる」旨の注記を添えている。Vol. 3, p. 589.
- (25) 前嶋信次「アラビアン・ナイトの世界——カリフたちを中心に」前嶋信次・杉勇・護雅夫編『オリエント史講座』4 (カリフの世界)、學生社、一九八二年、二二二頁。
- (26) 前嶋信次「千夜一夜物語——作品解説」藤本義一編『グライフック版 千夜一夜物語』世界文化社、一九七七年、一六八頁。
- (27) 『新亞細亞』第五卷三—四号、一九四三年三—四月、一四四—一五二頁、九四—一〇九頁。
- (28) 前嶋信次『東西物産の交流』東西文化交流の諸相、誠文堂新光社、一九八二年、九—四〇頁。
- (29) 前嶋信次「宗教と非宗教——『千夜一夜』」岩波講座文学』4 (表現の方法 1 世界の文学、上) 岩波書店、一九七六年、二二九頁。
- (30) 「戦後日本」三三—三四頁。
- (31) Muhsin Mahdi, *The Thousand and One Nights* (Alf Layla wa-Layla) *from the Earliest Known Sources*, 3 vols., Leiden: E. J. Brill, 1984-94.
- (32) カルカタ第二版の出典は、いずれも第一巻より、pp. 84, 153, 187, 189, 766. 前嶋信次訳では、順に第一巻、一五八頁、第二巻、二六頁、八七頁、八九頁、第六巻、一〇一頁。フデイー版の対応箇所は、pp. 159, 269, 271. 「戦後日本」三四—三五頁。